

1. 毎月の科長会議及び医局長等会議に報告されている統計は以下の事項です。

是非一度内容をご覧ください。新しい発見ができ、新しい発想がわいてきます。資料は各部門の構成員がお持ちです。

- ◎院内感染レポート
 - ・院内におけるMRSAの検出状況
 - ・MRSA院内感染対策専門部会報告書(中検データ分)(中検データ補充分)(報告書当月新規提出分)
 - ・MRSA患者数(総数)月別動向、MRSA患者数(新規)月別動向
 - ・MRSA報告例Grading
 - ・VCM感受性、ABK感受性、MINO感受性
- ◎医療関係経費消費実績等調査
- ◎診療科別院外処方箋枚数等調及び診療科別院外処方箋発行目標
- ◎入院患者数調
- ◎外来患者数調
- ◎差額病床における稼働及び徴収状況
- ◎紹介患者調査表
- ◎入院診療計画加算及び退院指導料算定状況
- ◎査定減率の推移
- ◎診療科別平均在院日数



2. 今月号の病院統計(平成11年度病院管理データ調)

区 分	4~6月	7~9月	10~12月	備 考
入院患者数調(人)	46,564	48,894	49,406	
外来患者数調(人)	70,925	73,969	71,982	
病棟稼働率(%)	84.5	87.7	88.7	
平均在院日数(日) (一般病棟)	27.48	28.44	28.74	
査定件数(件)	1,884	2,336		
査定金額(円)	15,797,970	14,035,381		
査定率(%)	0.74	0.62		
患者紹介率(%) (診療報酬上)	39.9	42.5	41.9	
入院診療計画加算算定率(%)	71.96	73.47	68.41	
退院指導料算定率(%)	68.19	70.99	70.46	



将来の大学病院のイメージ図

巻頭言

創刊号によせて 1

特別寄稿

これからの大学病院を望む 1

移転推進室だより 2

病院長補佐のつぶやき 3

トピックス コンピュータ西暦2000年問題 4

高度先進医療の研究 5

病院ボランティアの声 6

メディア拾い読み 6

病院の統計 7

編集後記

今回、岐阜大学医学部附属病院の広報誌『鵜舟』を創刊することになり、その編集委員長を仰せつかりました。編集を終わって、貴重な時間を割いて原稿をいただきました学部長、病院長並びに関係者のみなさまに委員会を代表して深謝いたします。本誌の目的は、本病院の特徴、特殊性及びその他要点になる業務を中心とした情報を、本病院以外の総合病院、一般病院、保健衛生に関する行政官庁、一般社会に対して発信することです。これによってそれらの各方面からの返信を促し、それらを受けとめることによって、医療と医師育成に対する本院の貢献のあり方を模索することです。これらを通して、本誌がよりよい医療環境整備のための情報交換のきっかけになれば幸いです。今後の、ご協力を切にお願いするものであります。(北島康雄)



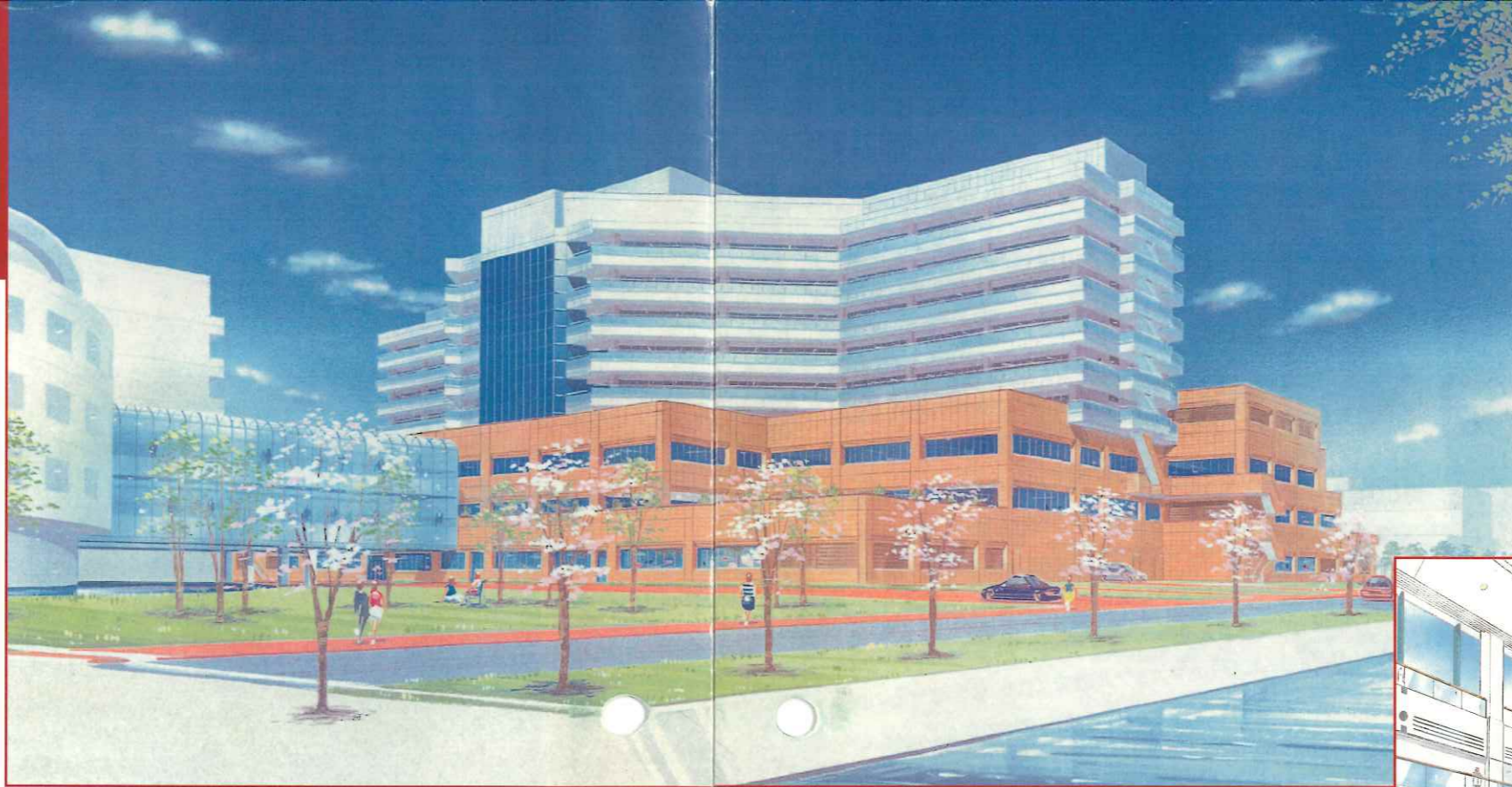
附属病院長
佐治重豊

●巻頭言

創刊号によせて

医学部附属病院の使命は、診療、教育、研究にあるが、病院としての特殊性は患者中心社会に医師、看護婦、医療技術者、事務職員などの病院側要員、患者家族や付添人、見舞客、ボランティアさん、さらには通行人(?)等、様々な人々が行き来できる公道的環境にある。すなわち、病院で働く職員、そこで治療を受ける患者さん、彼等を取り巻く社会環境は極めて多彩で、多様性に富んでいる。また、思想や考え方が全く異なる人々が凝集された集団社会で、誠に複雑な人間模様が病院には存在する。しかし、附属病院は高度先進医療を提供しながら患者中心医療を展開し、地域に貢献できる優秀な人材を養成する使命を担っている。また、これらの効率的運用と発展のためには、全ての職員や患者さんが病院の現状、将来計画と展望、解決すべき問題点や時代的要望、等々を共有し、広く認知されていることが必要条件である。

今、附属病院は21世紀型医療の展開、新病院への移転、独立行政法人化を含めた病院改革、等々目まぐるしい変動期を迎えている。また、成熟社会では将来計画や舵取りが極めて難しく、多くの人々の理解と協力が不可欠である。その意味で今回、患者さんの声、職員の声、病院が展開しつつある改革内容などを「鵜舟」に載せて病院広報として皆様方にお届けできる運びとなった。これをご愛読頂き、皆様からの投稿などで飾って頂き、末長く可愛がって頂ければ望外の幸せである。



将来の大学病院のイメージ図



医学部長
森 秀樹

●特別寄稿

これからの大学病院を望む

国立大学の独立行政法人化(独法化)に向けての内容がまもなく具体的になるうとしております。大学病院の在り方は独法化施行の前と後では随分異なったものになることが予想されます。当然、独法化施行の後では経常的な面の強化が要求されます。岐阜大学全体に於いては独法化後、医学部はいろいろな面で大学をリードする働きをする側面を持たねばならないと考えますし、附属病院はますます重要な立場に置かれることが予想されます。国立大学の附属病院は国立病院とは異なり、医学教育研究の義務を有しております。第一線の医学教育研究と効率的な医療のバランスの追求は最も難しい点ではありますが、腰の強い病院経営のセンスを有しながら、高度先進医療を含む程度の高い医療を長期的展望をもって行っていく必要があると考えられます。そのために今に増してコミュニケーションが良い効率的な診療体制が必要と考えられます。切に願いたい点の一つは、現在、なお大なり小なり存在すると考えられている医局講座間の壁の問題の解消であります。この難しい時代に於いて、医学部にとって附属病院にとって最も重要な点は、“人”の質の高い連帯と考えます。



1階 アトリウムのイメージ図

◎移転推進室だより

岐阜大学職員の全てが念願し、実現を心待ちにしていた、医学部・同附属病院の移転整備計画が具体化されつつあります。この計画は、大学の教職員がどれほど望んでも、また、地域社会の要請がどれほど強くてもそれだけでは実現できない大きなプロジェクトです。

地元の皆様の協力、文部省をはじめ、岐阜県、岐阜市、など多くの関係機関、多くの人々の協力を得てようやく実現の運びとなりました。この移転整備事業は、現在の予定では、附属病院が平成15年度に、医学部が平成18年度の完成を目指し計画が進められております。

附属病院の建物の概要は、免震構造9階建て、総延床面積は約60,000平方メートルです。

新病院の特徴は、阪神大震災クラスの大地震でも耐えうる免震構造であること。中央診療部門、外来部門などを3階までのフロア毎に集約配置し、その上に病棟を積み上げる複合型の建物で、少ない階層移動で受け付けから会計まで済ませることが出来るように患者動線が極めて単純化、短縮化されていることです。

外観はイラストのようになります。

患者サービスの点では、外来は2階フロアに集約配置し、患者の動線が水平移動だけとなる臓器別外来。病棟は分散式トイレの導入及び、十分な居住空間を確保した病室が特筆されます。

また、迅速かつ的確で効率的な治療を行う観点から、3階フロアに集約して配置した手術室、集中治療部、重傷病床も見逃せません。

さらに、教育・研究の観点から、全ての診療部門に十分な広さのCCS(臨床教育)、カンファランス室が設置されるなど、21世紀の診療・教育・研究の全てに対応することができる最先端な病院となります。

また、医学部の移転整備計画は、平成12年度以降に基本設計が始まる予定となっており、現時点では、平成16年度から18年度までの2年間は医学部と附属病院が分離したかたちで運営することが考えられます。

次号からはより具体的な内容をお伝えすることになっています。



スタッフステーションのイメージ図

病院長補佐のつづやき

第2内科 教授 藤原久義

皮膚科 教授 北島康雄

看護部長 日比野幸子



第2内科 教授 藤原久義

昨年、佐治院長から病院長補佐になるようにとご推薦を受けたとき、院長や病院長補佐の仕事がこれほど忙しいものだと、いう認識が正直言ってなかった。毎月行われる科長会議の前に2回も十分な時間をかけて、事務の方々も交えて話し、科長会議の準備をすることも知らなかった。病院移転の業務は会議の回数においても、一回一回の会議が要する時間においても、またその準備においてもまさに膨大である。特に病院長の御苦労は大変であるというしかない。

そこで、病院長補佐としてのつづやきは、病院長、看護部長及び事務部長をはじめとする事務の方々の仕事がいかに多く、かつお互いの熱心な協力のもとで行われているかを知り、病院経営とは今まで私の経験した講座の仕事である教育・診療・研究とはまた違った意味で大変なことだなあと感じたことである。現在、岐阜大学医学部附属病院は病院移転や独立行政法人化を目前にして、かつてのような名誉職としての匂いが強かった院長職の時代は過去のものとなり、激動の真っ只中にある。生き残るためには経営面での血のにじむような大改革が必要であるが、岐阜大学でそれが果たして出来るのかというのが実感である。



皮膚科 教授 北島康雄

大学病院の多くの患者さんは他の病院では診断のつかないあるいは治療に難渋したために紹介された方です。このような患者さんを診療するにあたり、10年前までは、私たち大学病院の医師は、最善の医療を尽くすことが私たちの任務である臨床医、研究者、教育者としての責務を果たすことになりました。この大学における最善の医療とは保険診療、コストには縛られず診断と治療を第一に考えた医療です。その治療そのものが研究であり、その態度が教育でした。しかし、現在では一変して医療は経営が前面にでて、研究とは分離され、教育は自分の医療をする後ろ姿を見せるだけでは成り立たなくなりました。教育はカリキュラムに従ったマニュアル教育になり、倫理観や心の医療さえマニュアル化されています。難病、原因不明の疾病の治療、研究と開発、そしてよい医師の育成にはお金と時間の一見無駄としか思えない余裕が必要であり、それを許す社会の余裕が必要なのです。病院長補佐になりその矛盾に悩まされる時間が増えました。

看護部長 日比野幸子



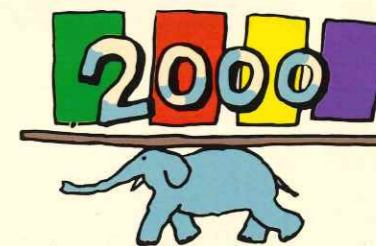
今年の迎春は、ことのほか心が躍る思いがした。一つは新しい1000年紀が始まるということ、もう一つは今年度末で長い公務員生涯に終止符をうつということである。

40年近くを看護の世界で生き、今一つの世紀から次の世紀に移行する時に、自らの仕事を引き継ぐことは、大変幸運だと思う。また、危惧していた2000年問題も異常なく経過し、例年になく新年が輝かしく思えた。気分良く過ごした正月休み明けの1月4日に、病院長補佐の辞令を受け、ゆるみがちだった気分が一瞬にして引き締まる思いがした。

新しい世紀は共生の時代といわれるけれど、それぞれが異なる目標や生き方を選択しながら、大学病院という大きな集団の秩序や安定を、いかに得るかは大きな課題であろう。

病院改革の一つでもある補佐制を意義あるものにすべく、退官までの短期間ではあるが皆様のご指導を頂きながら、わずかでも果したいと願う日々である。

TOPICS



コンピュータ西暦2000年問題「シュミレーション」

救急部 副部長 林 勝知

平成11年12月27日にシュミレーションが行われました。今回のシュミレーションでは、重大なトラブルが起こらないように、事前に診療科等における現状把握やコンピュータ2000年問題の危機管理意識の向上を目的に、アンケート調査を行いました。その上で、重症患者のレベルを高度重症、中等度重症、軽度重症と3段階に分類し、診療科等の実状にあわせた8パターンのシュミレーションのシナリオが作成されました。

その結果、大きなトラブルは生じることなく、シュミレーションは順調に終了しました。最も心配されました自家発電の容量が不足するということや人工呼吸器がうまく作動しないということは一切ありませんでした。このシュミレーションにより自家発電の点検ができたこと、また、医師、看護婦、事務職員の危機管理意識も向上



しました。さらに、情報伝達の訓練も同時にできました。おかげで、実りの多いシュミレーションとなり、2000年問題の本番も無事にクリアすることができました。



高度先進医療の研究

現在の医療は、これまでのめざましい科学の進歩を受けて成り立っています。この進歩を停滞させることは許されず、21世紀の医学医療の最前線において活躍することを目標とする岐阜大学医学部附属病院として、新しい診断・治療法の開発は今後の最重要課題であります。これらの開発に組織的かつ不断に取り組み、地域はもちろん日本の医療水準の向上に寄与しなければなりません。

本院は、すでに高度先進医療として、全国に先駆け、いくつかの高度な医療を提供しているが、平成11年度から新たに高度医療に関する萌芽的研究の助成を趣旨に院

内公募し、採択課題については、病院長の裁量範囲での研究費を重点的に配分し、それらの研究成果の臨床面への早期応用化を目指すこととしています。

研究課題は実現性があり、早い機会に臨床面への応用が見込まれるものであること、また、当該分野における研究の学術的特色・独創的な点など大学病院における新しい診断・治療法などの医療技術の開発、重症・難治疾患に対する治療方法の確立等を目指すものを対象としています。

平成11年度に採択された研究課題は下表のとおりです。

診療科等	研究課題	研究責任者
第一内科	骨髓中CD34陽性細胞上TNF- α レセプターの発現強度を用いた再生不良性貧血の診断法の確立に関する研究	森脇 久隆 ☎ 2843
第二内科	冠動脈内視鏡と血管内超音波法を用いた冠動脈病変性状診断	鷹津 久登 ☎ 2607
第三内科	血管内皮細胞機能検査を使用した糖尿病性血管障害の早期診断・治療法の確立	安田 圭吾 ☎ 2327
第二外科	樹状細胞と癌抗原で誘導したキラー細胞による特異的免疫療法の開発	杉山 保幸 ☎ 2621
	胃癌及び大腸癌術後の微小転移の遺伝子学的診断法の確立	國枝 克行 ☎ 2621
産科婦人科	婦人科癌の抗癌剤無効例に対するGnRHアナログの使用：Dormancy療法とQOL改善	今井 篤志 ☎ 2631
脳神経外科	脳卒中患者における発病、再発関連遺伝子の検索とその診断法の開発	竹中 勝信 ☎ 2348
皮膚科	ケロイド及び肥厚性瘢痕に対するDYeLasclの臨床的効果に対する検討	神谷 秀喜 ☎ 2646
	ELISA法による天疱瘡患者血清中の抗デスメグレイン1及び3抗体価と治療法選択と治療効果の判定に関する検討	青山 裕美 ☎ 2280
泌尿器科	尿路性器腫瘍におけるmolecular stagingの構築とその妥当性の検討	山本 直樹 ☎ 2654
小児科	遺伝病・アレルギーの総合的・系統的遺伝子診断の確立と治療開発に関する研究	近藤 直実 ☎ 2287
高齢科 (神経内科)	non-RIによるPCR-SSCP法を用いた遺伝性神経疾患の複数変異の同時診断	松山善次郎 ☎ 2378

次回から、研究課題の詳細を個別に掲載します。

病院ボランティアの声

ボランティア「のぎくの会」

ボランティア「のぎくの会」 中澤 睦子



平成10年7月会員数14名で発足しました。その後会員数の増員はありましたが、家庭また、大学の授業等の事情で1人去り2人去りして現在15名で淋しくなりました。

始めは手さぐりの状態でとまどいもあり、会員の方達との会話もなく情報交換もなく、継続できるか心配でした。

全国病院ボランティア協会に加入し、他の病院との情報や研修の場を持つことができ、一歩ずつ歩み出すことができました。

ある病院のボランティアの82歳「女性」の方ですが、1,000時間を目標にして「がんばっています」との声も聞かれます。

人の為ではなく自分自身の為だと……医学の進歩で臓器移植までできるようになりましたが、21世紀は「心のケア」ではないかと思っています。

病院の玄関受付で「温かい言葉をかけてもらった時の、うれしさを忘れ

ません」との声も聞かれるようになりました。

「今日は人の身、明日は我が身」一日一日を大切に、健康であることの幸を願ってボランティアを続けていきたいと思っています。

会員の減少で1人でも多くの方に、手をさしのべて下さる会員をお待ちしております。

小児科ボランティアの喜び

ボランティア「のぎくの会」 神山 純子

「おばちゃん、今日も本たくさん読んでくれる？」そんな子供の声に、今日も来て良かったと思わずうれしさがこみ上げてくる小児科病棟のボランティア。

週に1回を目標に始めたボランティアも1年半になりました。

いっしょに勉強をしたり、紙芝居をしたり、お母さんたちのお話を伺ったりその日によって活動はいろいろです。元気に外を駆け回りたいはずの子供たちが、治療のためにベッドでがんばっている姿をほんの少し応援したいと続けています。

堅い絆で結ばれている長期療養中の子供たちとお母さんたちには、私たちの力はあまりに小さく役に立たないかもしれませんが、でも時にはふっと外の風を感じていただければと願い、今日も青のエプロンのおばちゃんは小児科病棟をうろついています。

患者さんも、職員の皆さんも気軽に声をかけてくださいね。



さる2月10日(木)本医学部で行われている「模擬診察」のようがNHKニュース11で特集として全国放送された。この「模擬診察」について指導教官は次のように語っている。

医学生は、先端医学を学ぶが、これを医療に生かすためには、患者とのコミュニケーション能力を身につける必要がある。

医学部では一般市民のボランティアを模擬患者として育成し、臨床実習教育の現場に参加してもらっている。この模擬診察で医学生は、自分の会話能力を第三者的に見つめる貴重な機会を得て信頼される医師へと成長する。



「NHKニュース11」放映より転写